

南京 饒舌なる無音

井坂康志

I 取り巻かれている感覚

やはり人は年をとると若い頃とは異なる見方をもって世間に対するようになるのだろう。確かに私はこの世界を二十歳の時と同じようには見ていないし、同じように考えてもいない。実際に本を読むのがかなり億劫になってきた。長い距離を散歩するのもどこか大儀な昨今である。しかし、一方で若い頃には目にさえとまらなかった事柄を知覚したり、聞こえなかった音を聞くようになったのも確かである。

数年前にベルリンの安宿を出たとき、向かいから来る中年の男がブラームスのハンガリー舞曲を軽く口笛で吹きながしながら、清新な朝の街に消えていくのを見た。異国の朝はなぜか懐かしく、朝ほど自分に正直な時間はない。朝自分に嘘をつくのは至難である。あの口笛が何を意味するのか、ずっと考えながら、私は朝まだきベルリンの教会堂の通りから、川沿いの壁の落書きが赤光に照らされるのを眼に収めていた。歴史が暴力的に収斂するときの瞬間をこの壁は残らず見ていたのだと思うと、不思議な感慨を覚えた。あのとき、ふと北風のようなディランの初期の曲が一つ心に浮かんで、突き抜ける空に吸いこまれるように消えていったのを記憶している。

そんなあてもないことを、南京のホテルの部屋でただあてもなく自問自答していた。やがて消滅したと信じたものは暗渠のどこかで力を蓄えて甦り、今ここに何か抗しがたい力として再現つつあるのではないかと思うようになった。ホテルの窓からは、ごくひとかけらの玄武湖、そして埃っぽくはあるが機能的な道路が力強く湾曲するのを目にすることができた。今から80年ほど前、ここで何が起こったのだろうか。出来の悪い蓄音機に話しかけるように、私は自分に問うてみた。

かすかな口笛が聞こえた気がする。縁あって日本人として生活する自分にとって、現代人の感覚がついて行けないくらいに、現在進行中の何かをはっきりと感じることができた。言うまでもないながら、実体的で生々しい暴力の予兆だった。おぞましく、どこまでもグロテスクな破壊衝動だった。現在もなお、まがりなりにも世界が維持されている事実を、たぶん第二次大戦前に命を落とした人たちが目にしたら苦笑するに違いない。どこまでもありのままの無垢な知覚をもって、彼らは笑うだろう。無垢な知覚を保持するのは、たいていの場合、生きた人たちではない。すでに死んだ人たちだ。

今までも時々感じたことがある。死者たちは今を生きる生者たちの対極にあるのではない。あるいは一部をなしているのでもない。もっとはっきりと言えば、死者たちは生きる私たちを「取り巻いている」のではないかという感覚だ。その感覚が私の中でリアルなも



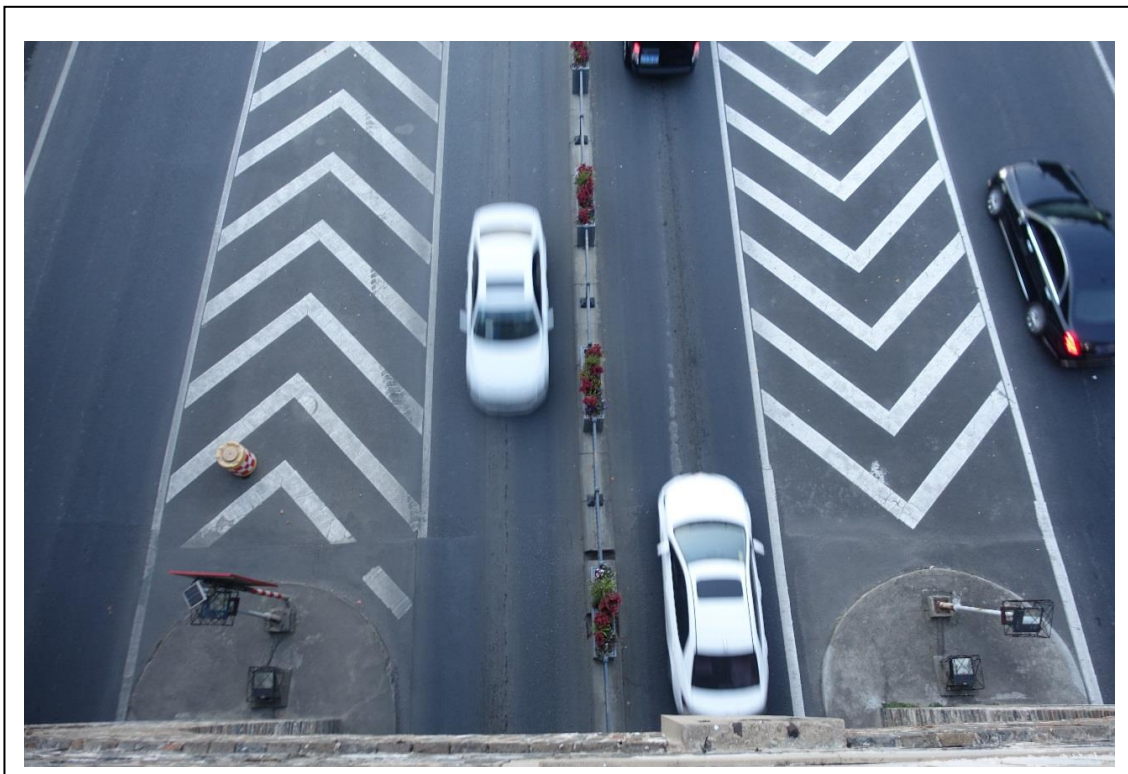
窓からの市街風景。

のに育っていったのは、この10年くらいのことであったと思う。「取り巻いている」という語の選択が私の実感を最も正確に表現している。それは森を生きる人にとっての霧や、水に住む生物にとっての渦流のように、ひたすらからみあい、取り巻いている何かである。物質の形態をとってはいても、それを形成する動因自体は視覚でとらえることができない。たぶんその一端を確認したくて、以来、しばしば欧州の玄関マットとも言うべき、ポーランドの強烈な死者たちのモニュメントを見にいくようになった。

私はただ死者たちの声に耳を傾けたかった。そのなかで、変な言い方をしようだけでも、聞いてはいけないものまで聞いてしまった気がしている。

あえて言うまでもないことだが、ナチスと日本との間には共通する暗闇がある。戦後日本国民は体面上それらをきっぱりと拒絶し、美しく平和な社会を手にしたかのように錯覚している。あるいは錯覚を自身に納得させるために、八重の封印を自らに印しているようにも思える。だが、錯覚はどこまでいっても錯覚だし、幻影はどこまでいっても幻影である。以上でも以下でもない。

日本の近代史、とりわけアジアへの恫喝的姿勢と、それとのコントラストにおける欧米



への低姿勢を思うとき、自身がその一部であるようにも、あるいは自身の中の一部であるようにも感じる。いずれ

にせよ、日本近代史へのアムビヴァレンツは、理由はわからないのだが、形を変えたわが心の来歴への苛立ちに似た何かを感じる。結果として、私は1930年代後半の異常な「軍事的バブル」のうちに、まっすぐな成長の阻害ばかりを心に懸けている。純粋な自己主張の危険、一本気な倫理観と拡張主義の危うさを見る。そして、日本を取り巻く近代国家の疾風と怒濤は今もなおやむことなく吹き荒れているのを知る。

確かに日本は敗戦をもって、自らの蒔いた毒麦を刈り取ったのだが、戦後に展開されるってつけたフェイクの自意識によって、どの孤道に分け入り、自らを救おうとしたのか。もちろん特攻隊に見る純真無垢な青年たちに、かぐわしき浪漫主義の沃野を見出すことも可能である。しかし沃野はいかに気高く美しく見えようとも、赤く錆びた号砲を内に蔵し

ていることを忘れてはならない。自国を誇らかに称える心性を、どの傍証を用いようとも、現代に適用したいとは思わない。なぜなら、明治以来この国によってその心性はうまく運用された例をもたないためである。私はその点に無関心でいることはできない。

だが、どうして、かの日本軍はほとんどというか、完全に不可能な夢に憑かれたのか。畏だったのだろうか。浪漫派的だったのだろうか。

わからない。ともあれ、当時の軍部は、国家という装置を利用してしか、自身の救済を願えなかった。いや、軍部の上層は、個としての実存の飢渴を国家システムに仮託して救済しようとしたに過ぎなかった。頭目だった東条英機は、数え切れない若者に死を命じておきながら、自分の頭一発撃ち抜けず、軍人として最低の醜態をさらした。しかし、彼らのほぼすべてはもうこの世にはいない。彼らの所業を見るに及び、ほとんど生身の人間のなしたもののようには思われぬ。南京紀行でしばしば目にする悪魔の二文字に表象される香炉の中で燻され、やがて東洋全域をさまよった不吉な狼煙のように感じられる。

今なお、薄い紫の煙は死の国からの呼び声のように、黄泉からの横笛のように、日本という国の抱える宿痼というか、本質的な謎の所在を示している。私はそのことをずっと言語に置き換えたいと思って来たが、うまくいかなかった。私はそんな生まれてから抱えてきたざらりとした違和感に言葉を与えたいと思って、空気とも煙ともつかぬものを追って、しばしばヨーロッパに定期的に心を沈めてみたのだった。

II 老人の会話

思い出とは成り立ちからいってセンチメンタルなものである。ならば、26年も前、バブル崩壊後の乱脈な時代に、ともに早稲田をうろついていたご縁で、真辺将之さんと南京から上海にいたる経路をご一緒いただけしたのは、幸いといしか言いようがなかった。真辺さんは早稲田大学文学部で近代史を教える学者である。



郊外の老人。

真辺さんは南京や上海で目にしたものについて、たんたんとした表現で私に教えてくれる。教えてくれるというより、流し込んでくれる。クールな口吻は生来の歴史家というほかの表現を知らないが、私は真辺さんの質朴な声に触れるにつけ、歴史における事実を思いあぐねた煩悶の跡を感じる。断定や否定の調子はない。それでも、近代日本の広大な舞台裏ともいべき中国大陸で行われた日本軍の蛮行という得体の知れぬ実態について、静かな抗議の念を感じるのはさほどむずかしくはなかった。

南京事件は日本近代史の躓きの石とはしばしば言われることである。実際に南京を訪れて感じたのは、ことの単純さにおいては、事実の正確さは露見しない方がどうかしている

ということだった。それほどまでに、曖昧な解釈が身を隠す場を見出しえず、ただそこに往時のまま横たわっているかに見えた。だが、かえってものごとの単純さは、そのゆえに後世の私たちに異なる風景を映し出してしまうのも真実のようだ。誇張された興奮や緊張、過剰な類推、無用な推論などは、戦後の空虚化した日本人の精神に、どれほど好都合な居場所を供してくれたことだろう。南京で何が起こったか――。たったそれだけの純粋で真実な問いは、純粋で真実であるほどに、歴史的試金石というよりも、躓きの石だったのだ。かえって単純さに正直かつ鋭敏であろうほどに、結果を導き出すのは容易ではない。

いずれであれ、現在の南京市民の素朴で人間らしい心根に接するならば、また別の印象を伴うようになる。現地を訪れて思うのは、生身の人間世界である。私はしばしばホテルのエレベーターで、駅で、素朴な中国語が話されるのを耳にした。中国語は時々東欧の言語のように、短い子音からなるセンテンスが何度も繰り返されるように私には聞こえる。ある短い韻律が、時に転調し、引き延ばされ、会話者の相づちや合いの手、あるいは吐息や笑いによって精妙な和音になる。

彼らの表情から、何か観念的な話題が選択されたわけでないのはわかる。そもそも選択される理由など生活の中に存在しない。彼らに必要なのは、あるいは主題でさえない。むしろ継続する楽音の響きである。肉声である。

真辺さんと南京中心部にある慰安所の博物館を訪れた後、路線バスに乗った。すでに大きな肉声が車内に響いていた。声の主は老人だった。声が偶然に鳴り響いているわけではないのは、老人の表情を見ればわかる。老人は車中乗り合わせたいくらか初老に足を踏み入れた小柄な品のいい女性と言葉を交わしていた。何か話題を必要としていたわけではない。必要としていたのは、声帯や空気を振動させることで、共鳴の場をつくることだろう。東京の公共空間で支配する冷たい沈黙と比べるならば、自由な和音に似たものがあった。私は光景を一場のストリートミュージシャンを見るように眺めていた。

私は中国の人たちが時折見せる表情も好きだ。とくに老人が見せる表情である。ふだん東京の都心で何かのガラスに反射した自分の姿を目にすると、何かしら大切なものが欠けた生物であるのを感じる。違和感が正当なものであるのは、中国の人たちの純朴な利己心をバスや地下鉄で目にして実感が変わった。彼らがあえて列に並ばず、われさきに乗り込んだり、割り込んだりすることは間違いのないことだが――これは自転車に乗っているときに感じた――彼らの動くものへの視覚の繊細さは驚くべきものがあり、歩行者や自転車をよけるときに見せる自動車の運転手の目には、信号をはじめとする記号の論理に慣らされた私からすれば、細やかな内的感覚への信頼を感じることができた。

Ⅲ 二重の感覚

しばしば現実について考える。現実とは世で言われているよりはるかに慎重な観察を要する。南京に日本軍が侵攻したのはすでに80年も前である。時の波に洗われた惨事はどこもなく浄化されている。手にとることができるくらいに冷えて光沢を帯びている。

だが、あえて言うまでもないことながら、時の流れに浄化された歴史像は単なる美しい叙事詩ではない。血のヴォイスであり、肉体を伴う事象である。やはり、銃声が鳴り弾丸が鉄兜ごと頭部を吹き飛ばせば、噴水の鮮血がほとばしる。そして、ほとばしりが、中国側の主張では30万あったということなのだ。

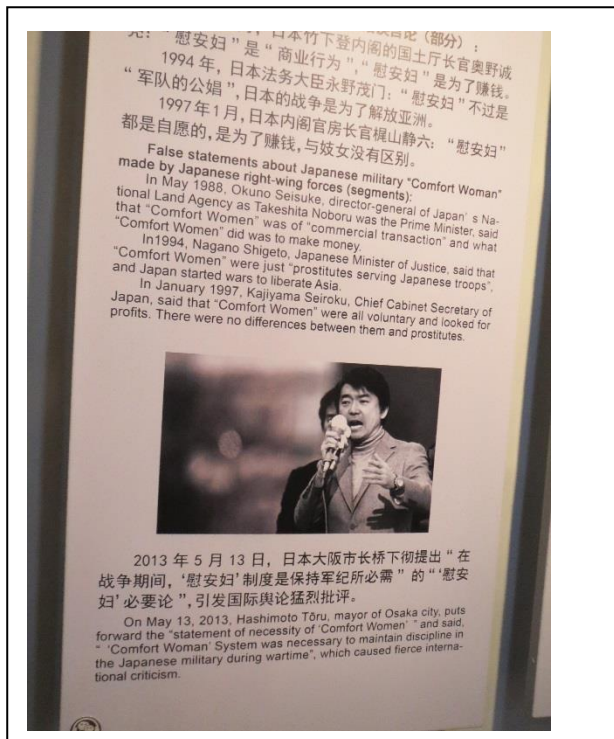
人が人のヴォイスでしか語りことができぬように、血は血の言語でしか語りすることはできない。現実には流れる血を、あるいは流された血を、表象の言語で拭わしめることはいかにあってもできない相談だ。ささやかながら理想主義を追求しようと志すなら、最低限血の流された土地を踏みしめるのが礼儀と考えたのはそのためである。あたかも老婆を惨殺したラスコーリニコフが、センナヤ広場に額づき、大地を接吻するように――。

南京の街に到着したのは、10月31日の夜だった。しんとしていた。古い歴史をもつ都市がおしなべてそうであるように、人間の生身のもつ複雑な息が、町の小さな通りの隅々にまで織り込まれ、浮き足だったところがない。翌日、真辺さんに計画いただき、市内に残された日本軍による爪痕を見ることになるのだが、何より真辺さんが約25年以上前――その頃私たちは二十歳をようやく迎えたばかりだった――に訪れた南京との二重写しとなった絶妙な風景をともに目にすることになった。

言うまでもないながら、四半世紀とは決して短い時間ではない。その間あまりにも多くの変化がこの街を蔽ったようである。そのことは、初めてこの街を訪れる私にも空気感として受け取ることでできた事実である。さらには、真辺さんの記憶と歴史家としての研ぎ澄まされた言語を水先案内にこの街に歩を進めるとき、ほとんど十分に文学化した1937年の血と汗によって養われたリアルな連想を余儀なくさせた。恐らく、イメージの喚起力に関して言うならば、目の前にある歴然たる空間以上に、言語とはあまりに強力なメディアなのであろう。私が思う以上に。



記念館内の碑



言語とは、人間の精神の最も硬い岩盤に、そして、切れれば鮮血のほとぼしる人間の柔らかい肉体に、しっかりと密着する地表のようなものだ。今から80年前、中国でも、あるいは日本でも、さらには別の国々でも、たった一文で人はかけがえない命をほとんど賭博師の一枚のカードにも及ばぬ価値とともに賭けることとなった。もしそうでなければ、人として生きられぬような、誰のものでもない命と日々対峙せざるをえなかった。やがて一定の年月が流れ、信じがたいほどの愚挙が真昼の天下に晒された後でも、言葉は詰まるところ精神の肉体である。そのことを当時の人たちがほど知っていた者はなかったであろう。今ではネットの羽よりも軽い、自称言語で、あまりにも穢らわしい評言に、死者たちの発し

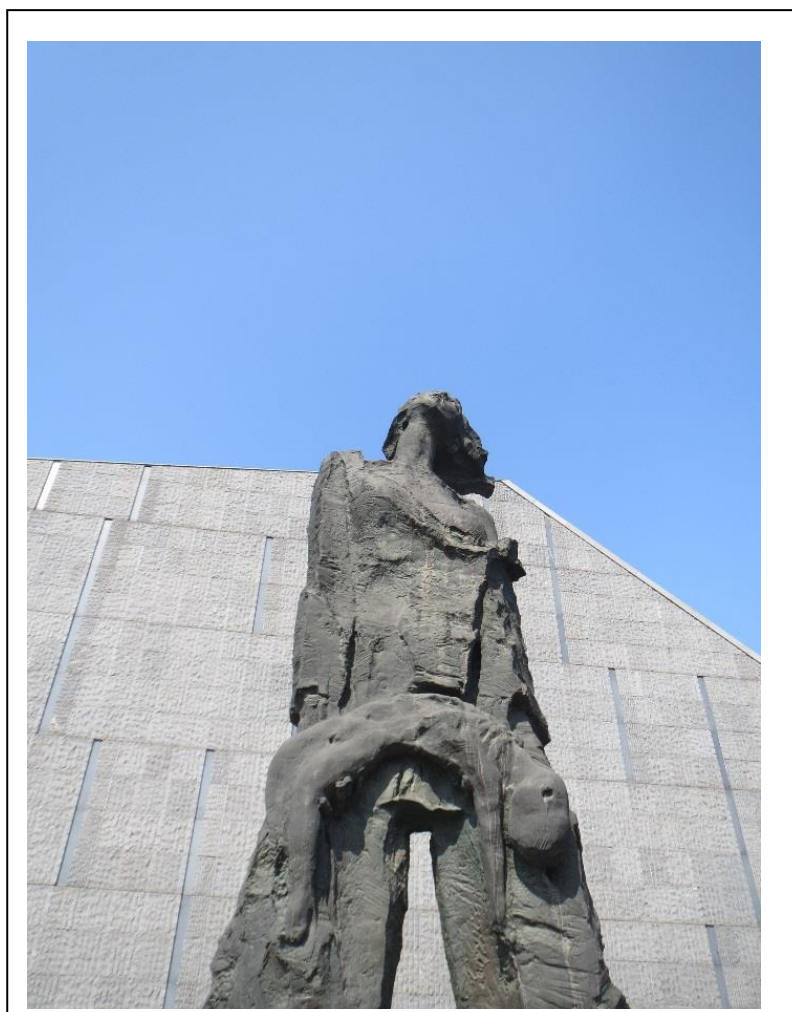
た裸の肉声は、空を漂っていることだろう。そしておそらく、今なお日本の展開にとって暗黒の枷となっているのは、現在進行中の国際的問題と言うよりは、次元の異なる垂直の課題として、すなわち、陵辱されて行き場を失い、ために今なお周囲をうろつき、黒衣をまとった80年前の死者たちの大群であることを思い知らされる。

戦後の日本は、いわゆる過去の現実への観察力を鈍化させることで成り立ってきたし、それにある程度成功もしてきたであろうが、それに似つかわしい展開経路を提供してくれたのであろうか。大戦時の軍事的バブルとそれに伴う奇行蛮行は一睡の悪夢というにはあまりに切実な意味を突きつけている。夢はすでに覚めているのだ。反転したディズニーリゾートであるから、夢を覚ますのももう一つ別の夢が必要になる。それは現実という名の夢である。

耳を澄まして聞くほかない。聞かれるはずのない無数の人々の声をである。

IV 愚問

真辺さんは私の心に浮かぶほとんどすべての質問に簡潔に、的確に答えてくれた。素人目にさえ明らかな愚劣や不正に対しても、真辺さんは熟慮専念しつつ答えてくださった。一言の不平らしい言葉も真辺さんの口から聞くことはできなかった。これは私のような不平家にはほとんど到達しえぬ境地であるのだが、理由としては、私が自身と折り合っていないためだろうと思った。



私が私自身と折り合わないために、一つの歴史的愚行がほとんど内部環境のように見えて来る。自身の来し方に対して客観的であるのはとてもむずかしい。かりに自分が1937年の南京にいたら――。ひたすら恥ずかしい気持ちになる。あえて言葉を換えれば、真辺さんに代表される歴史家の強い精神にとっては、愚拳によって引き起こされた蛮行もまたやはりあるがままの環境であって、称讃すべきも非難すべきもない、ただそこにあるだけのものなのかもしれない。ある面で、素人の私からすれば物足りないのだが、少なくとも空想的ではなく、ものごとの因果の連鎖を真率に尋ねようとしている。

しかし私の愚問のなかで、たった一つ、真辺さんに長い沈黙を強いたものがある。たった一つだ。

「なぜ日本軍は中国大陸に赴かなければならなかったのか」。

石橋湛山のようなジャーナリストは、日本が満州を領有することが、経済的に引き合わない事実を実証的に明らかにしているし、果たして軍事的に見ても収支が合うかは当時の人々からしても相当に疑問であったろう。もちろん軍事行動とは、その場その場のやりとりであって、常に何らかの機微というか一触即発を含んでいる。偶発のもの、未知のもの、予め計画した論理では取り扱い不能な要因を多少なりとも含んでいる。しかし、それにしても、戦争はチェスとは違う。生温かい血は結果として確実に大地を潤すことになるだろう。なぜにかかる即興的行動に国運を傾けたのか。

真辺さんはついに言葉を発しなかった。むろん見解はあるに違いない。しかし、一つの行動の動機を想像する段になると、せいぜいのところ耳障りのいい偽名に過ぎなくなることを真辺さんは十分に承知していたのだろう。いや、というよりも、歴史への真摯な探求心は、最終的には人を饒舌にするよりも、沈黙させるものなのかもしれない。そのことを徹底して考える人はたぶん安手の思想が手軽に喧伝される時代には例外に属するに違いない。

真辺さんの沈黙に曖昧なところは一つなかった。曖昧さが無いということは、もちろん心内の働きの単純でないことを表している。言葉を曖昧にするのは、たぶん歴史家としての真辺さんにとっては、精神活動として不可能なことなのであろう。言語においてクールでありながら、内において激しい熱度を維持していた。

実は私は真辺さんの個人としての嗜好や価値観についてはきわめて少ない知識しか持ち合わせてはいない。しかし、ただ一つ知っていることがある。猫を愛する人であると言うことである。猫が好きというのは、真辺さんの質朴で天凜を備えた人柄を思うとき、よほど大切なことのように感じることもある。それでも、なおのこと私は想像するのをやめられない。日本軍は何を狙ったのだらう。何を求めてわざわざ中国に向いたのだらう。10万以上もの大軍をなぜ無計画に、補給線もないままに、野に放ったのだらう。ふと思った。目的や企図は歴史における過程としてはさほど有益ではないのかもしれない。かえって目的や企図が曖昧だからこそ、大胆な行動がとれるとも考えられなくはない。大事ではないからではない。あまりに無根拠な欲を持つために、結果として多く



中山門から市街を見下ろす。

の人々を、そして最悪なことに当人たち(末裔である私も含まれる)の目を眩ますからだ。

私なりの答えをあえて言えば、戦争が何を差し置いても渴望されたのだ。要は戦争がしたかったのだ。日照り続きの季節でなされる急ごしらえの雨乞いのように。

昨年、下関を訪れたとき、地元の方が現地を親切に案内してくださった。恥ずかしいとしか言いようがないのだが、案内をしてくださった市役所を退職した男性が、巖流島について語るのを聞いて、はじめてかの有名な巖流島が下関に所在することを知った次第であ

る。そのとき、さすがに男性に直接聞くのがはばかれて、机の下でスマホで概要を検索する仕儀となった。男性は、巖流島で行われた宮本武蔵と佐々木小次郎の決闘を語った。一般に講談調で語らない方が難しいほどの、あまりに日本人の耳になじんだ話である。男性は抑制的にクールに語るのが印象的だった。語り口に触発されたのかもしれない。私はふとした疑問を口にしてみた。「どうして、離れ小島で二人は戦ったのですか。そもそもなぜ戦わなければならなかったのでしょうか。もし武術の腕を試したいのなら、衆人環視の中で行うのが合理的のようにも思うのですが」

男性は5秒ほど沈黙した。沈黙してからこういった。「たぶん、巖流島で戦いたかったのではないのでしょうか」

私はこの答えになぜか心から納得した。きっとそうではないかと思った。

V 人工的沈黙

南京虐殺記念館の饒舌な展示に対峙して感じたのもそのことである。私はやむなく口をつぐみ、安直な言語化への衝動をあえて押しとどめ、かえって目を働かせようとする。しかし、沈黙はどこまでも人工的なものであるから、人工的沈黙に対して人工的言語を發し

たいという衝動はなかなか抑えがたい。だが、うっかり言葉を口にしようものなら、盲目の欲求に従事することになるのは火を見るより明らかである。歴史を直視するとは、何より沈黙に耐えることなのかもしれない。

歴史的な真実がどこにあるのか、あるいはそもそもありうるのかもわからない。けれども、真実を求めるとは一つの抗しがたい力であって、そして恐らく探求によって得られた内容とは一般に考えられるよりはるかに凡庸であるに違いない。思想や哲学を可能な限り介在させるべきではないの

だろう。まして、概念を介在させるべきではない。なぜなら、いつしか人は自分が生み出した概念の奴隷に喜んでなろうとするから。それもまた、歴史を語る者にとってはありうべき罫であるに違いない。

南京虐殺記念館には二つの側面がある。一つは饒舌な展示資料、そして饒舌という舞台の上に構築された無音である。少なくとも前者は今日の支配的な歴史観に群がりあるいは反発する思想や感情の干渉をきっぱりと峻拒するごとく、隆々たる骨格をたたえているかに見える。一方で後者は、事実を正当に



長江の夕景。



語るものは沈黙しかなく、それしか真の意味において人に立ち止まらせ黙考を促すものはないとする確信に似たものさえ感じさせた。そのありようは、ふとしたところで見かけた日本語のモニュメントに刻まれた「贖罪と慰霊」を模範的に表現していた。溢れんばかりの情報が知識が人に沈思黙考の素材を供するのに失敗している（そこでは沈黙さえもが饒舌である）。そのなかで無音以外に信頼しうるものはあるのだろうか。

同様の点は、数年前ポーランドのアウシュヴィッツを訪れたときに感じたことでもある。ナチスの蛮行を批判しようと、あるいはそれ自体では人に思考と内省を強いるのは絶望的に不可能である。もちろん他者の思考の門前から扉までやってきて力強くノックすることはできる。だが、しばしば私は思うのだが、こと精神の働きについて言うならば、ドアノブは常に向こう側のみにとりつけられているのではないか。数千万語費やされようとも、一つの小さな無音にかなわないのはそのためである。無音とは、おびただしい拳によるノックから距離を置こうとする心のあり方にほかならないからである。

一方で、ワルシャワから100キロほど北東にあるトレブリンカで目にしたのはまた異なる種類の風景だった。広がるのは、茫漠たる森とおびただしい数の花崗岩のみだった。かくもあまりに多くの事柄が生起し、消えてしまったとするなら、どこに尺度をおいてよいのか、どうにも手がつけられなかったに違いない。良質の森と石材がやたらにある国だったのもあるのだろう。あるのは、圧倒的な手つかずの無であった。なぜナチスが欧州を制圧したのかなどという子供じみた質問さえ拒絶する、動機も何もまったく欠く無重力の空間だった。一つだけ、明確に感じさせたのは、固く重く頑強に提供するある種の暗闇に似た意思である。無音への意思が、この半ば放置された頑丈な無言のモニュメントをつくり出したのだ。周囲には私以外には誰の姿も見あたらなかった。森をただよう赤光ばかりが目痛かった。

確かに知識や情報は相手を批判し、論破し、時には説得し、多数の行動をとらせることもできるかもしれない。しかし、人の内面に裏打ちされた精神の行動は本質的には自由を核に蔵している。誰もが威勢のいいばかりの言葉に飽き果てており、心の暗室のスツールに腰かけて虚空をにらむ無音への対峙からあまりに遠く離れている。というのも、こんなことをいっては身も蓋もないかもしれないが、真実などというものはもともと事物の客観性とは何の関係もないのかもしれないのだ。

展示物を見ながら、私は自分に言う。何があったかなど誰にもわからない。けれど、確かに何かがあったのだ。冷却された歴史像を遠く離れた日本で思索するほどに快いことはないかもしれない。安全地帯からの放言ほど人を無為に癒すものはない。南京の展示は、あえて言えば、写実主義に徹している。これほどまでに豪壮な博物館なら、国家プロジェクトとして遂行するのは無理もない話であろう。ただし、それを裏側から見れば、それぞれの展示がどこことなく孤立している巨峰のようにも感じられた。

もちろんあくまでも私の感じ方に過ぎない。